

茶の歴史から学ぶ中国

加藤 徹(明治大学教授)

<http://www.isc.meiji.ac.jp/~katotoru/stdnt.html>

中国で過去数千年来、変わらなかった特徴や、中国文明が現在まで引きずっていることは何か。日本や西洋と比較しつつ、茶の歴史をテーマに解説。中国で抹茶がなくなった理由も考える。

○ポイント

禅語 **喫茶去** きっさこ 出典は『五灯会元』巻四

唐の禅僧・趙州從諗(じょうしゅう じゅうしん 778年 - 897年)の故事

師問新到「曾到此間麼」。曰「曾到」。師曰「喫茶去」。又問僧。僧曰「不曾到」。師曰「喫茶去」。後院主問曰「爲甚麼曾到也云喫茶去、不曾到也云喫茶去」。師召「院主」。主應喏。師曰「喫茶去」。

し しんとう と かつ すかん いた いわ かつ いた しいわ きっさこ
師、新到に問ふ「曾て此間に到るや」と。曰く「曾て到る」と。師曰く「喫茶去」と。

また そう と そういわ かつ いた しいわ きっさこ のち いんじゅ と いわ
又た僧に問ふ。僧曰く「曾て到らず」と。師曰く「喫茶去」と。後、院主、問ひて曰く

なん し かつ いた ま きっさこ い かつ いた ま きっさこ い
「甚麼と爲てか、曾て到るにも也た喫茶去と云い、曾て到らざるにも也た喫茶去と云ふ」

し いんじゅ め じゅ おうだく しいわ きっさこ
と。師「院主」と召す。主、応喏す。師曰く「喫茶去」と。

- 茶の起源は中国南部、喫茶の歴史は二千年以上
- 茶は酒に比肩する中毒性があった
- 茶は薬でもあった
- 官茶、商茶、私茶
- 西洋の近代史に日本と中国の茶が与えた影響
- 日本のさまざまな茶文化。茶道(抹茶道)vs 煎茶道、武家茶・町人茶・公

家茶(依田徹著『皇室と茶の湯』)・寺社茶、等々。

○茶の種類

★原材料による分類

狭義の茶：チャノキの葉や茎を材料として加工した飲み物。

広義の茶：いろいろな材料から作った飲み物。例：柿の葉茶

★加工方法による分類

陸羽 (? - 804 年)『茶経』による分類

筒茶(そちや)、散茶、末茶、餅茶(へいちや)

筒は「粗」の意味。くず茶。ただし日本語の「粗茶」とは意味が違う。

散茶は、茶葉のままの形のお茶。

参考 <http://www.tea-jp.com/tea/6-tea/black/sancha/>

末茶は「抹茶」。日本では今も残っているが、中国では明(みん)の時代に衰滅。

餅茶は、粉にして練り固めた茶。中国語「餅」は、日本語の「モチ」とは意味が違う。

現代日本人が「茶」と言うと、散茶と抹茶を指す。現代中国では、散茶と餅茶が主流。

餅茶には、磚茶(たんちや。磚はレンガの意)、団茶(だんちや。団は円いの意)などがある。プーアル茶は今も団茶として飲むことが多い。

★現代の中国茶の分類

茶葉の加工の度合いや色により「緑茶、白茶、黄茶、青茶、紅茶、黒茶」の六つに分類する。庶民生活では「花茶」(ジャスミンティー。茉莉花茶)や「烏龍茶」(ウーロン茶)、「普洱茶」(プーアル茶)のような言い方が普通。

1. 緑茶

不発酵茶。現代日本では主流。中国の緑茶は日本と製法が違うので味わいが異なる。「龍井」(ロンジン)が有名。中国のペットボトルの「緑茶」は砂糖が入っていることがあるので要注意。

2. 白茶

弱発酵茶。希少。

3. 黄茶

弱後発酵茶。

4. 青茶

半発酵茶。ウーロン茶など。中国語の「青」はブルーではなく、黒みがかかった色。現代中国で最も普及しているのは、この系統の茶である。

5. 紅茶

完全発酵茶（全発酵茶）。

6. 黒茶

後発酵茶。雲南省のプーアル茶が有名。

日本でも有名なジャスミンティー(花茶、茉莉花茶)は、上記の各種の茶葉にジャスミンの花を混ぜたものの総称。「菊花茶」はハーブティーのような飲み物で「茶外茶」の一種。

この他、産地による分類に「中国十大銘茶」がある。

○中国茶の歴史

★喫茶の歴史は前漢から

孔子は(おそらく)茶を知らなかった。

茶は当初、南方のローカルな飲み物だった。原産地は不明で、

四川・雲南説（長江及びメコン川上流）

中国東部・東南部説

がある。原産地と黙される雲南省や福建省は、今も中国茶の製茶の中心地。

文献記録では、「茶」の存在は、

中国最古の辞書である『爾雅』（じが）。紀元前2世紀ごろ

前漢の王褒の文章「僮約」

などから確認できる。当初は四川省のローカルな飲み物で、現代と違い、いろいろな物を混ぜて飲んでいたらしい。

創作物の「三国志」では、よく茶を飲むシーンが出てくるが、これはあくまでも創作である。

例：吉川英治の小説『三国志』、中国映画『レッドクリフ Part II -未来への最終決戦-』（原題：赤壁。前編2008年、後編2009年）、他。

吉川英治『三国志』小説本編の冒頭部より

「茶を」

役人は眼をみはった。

彼らはまだ茶の味を知らなかった。茶という物は、瀕死の病人に与えるか、よほどな貴人でなければのまないからだった。それほど高価でもあり貴重に思われていた。

「誰にのませるのだ。重病人でもかかえているのか」

「病人ではございませんが、生来、私の母の好物は茶でございます。貧乏なので、めったに買ってやることもできませんが、一兩年稼いでためた小費もあるので、こんどの旅の土産には、買って戻ろうと考えたものですから」
(中略)

「おまえ茶をのんだことがあるのかね。地方の衆が何か葉を煮てのんでいるが、あれは茶ではないよ」

「はい。その、ほんとの茶を頒(わ)けていただきたいのです」

彼の声は、懸命だった。

茶がいかに貴重か、高価か、また地方にもまだない物かは、彼もよくわきまえていた。

その種子は、遠い熱帯の異国からわずかにもたらされて、周の代にようやく宮廷の秘用にたしなまれ、漢帝の代々(よよ)になっても、後宮の茶園に少し摘まれる物と、民間のごく貴人の所有地にまれに栽培されたくらいなものだとも聞いている。

また別な説には、一日に百草を嘗めつつ人間に食物を教えた神農はたびたび毒草にあたったが、茶を得てからこれを嚙むとたちまち毒をけしたので、以来、秘愛せられたとも伝えられている。

いずれにしろ、劉備の身分でそれを求めることの無謀は、よく知っていた。

——だが、彼の懸命な面(おももち)と、真面目に、欲するわけを話す態度を見ると、洛陽の商人も、やや心を動かされたとみえて、

「では少し頒けてあげてもよいが、お前さん、失礼だが、その代価をお持ちかね？」と訊いた。

(以下略)

南北朝時代(439年—589年)でも、茶は北魏で「酪奴」(らくど)と呼ばれる(出典は『洛陽伽藍記』の北魏の高祖と王肅の会話)など、まだ南中国の飲み物だった。

★唐の時代からメジャーな飲み物に

日本に茶が伝わったのも、遣唐使の時代である。

唐の時代に、茶は品格のある飲み物として広まった。李や杜甫、白居易などの

詩人はよく酒を飲んだが、茶についても少しだけ漢詩に詠んでいる。

李白の長編漢詩『答族侄僧中孚贈玉泉仙人掌茶並序』

杜甫の連作漢詩『重過何氏五首之三』の「落日平台上、春風啜茗時」

白居易(白樂天。772年－846年)の五言絶句。

山泉煎茶有懷 山泉にて茶を煎て懐ひ有り 白居易

坐酌泠泠水	坐して酌む 泠泠の水
看煎瑟瑟塵	見て煎る 瑟瑟の塵
無由持一碗	一碗を持して
寄与愛茶人	茶を愛する人に寄せ与うるに由無し

山の中の泉で煎茶を楽しみながら思ったこと。透き通った冷たい山の水をくんで茶を点てると、緑色の細かい泡がふつふつと見える。残念だな、都会に住む茶の愛好家に、この至福の一杯を飲んでもらう方法がないとは。

陸羽が書いた『茶経』は、日本の茶道にとっても出発点となる重要な書物である。

唐代の進士・王叡(おうごう)が書いた文章『茶酒論』は、茶と酒を擬人化して対論させる戯作的な文章だが、唐代の中国人にとって茶の薬理効果がアルコールに匹敵する作用をもっていたことを示すなど、貴重な文献。

★茶文化の普及は千年前の宋代から

宋の時代、皇帝から庶民まで喫茶の文化が普及。皇帝は超高級な茶を、庶民は安価な茶を楽しんだ。

茶にはタバコや酒に匹敵する中毒性がある。宋は榷茶法(かくちゃほう)という茶の専売制を行った。

宋代から「茶馬貿易」開始。北や西の遊牧系異民族には西辺の甲状軟骨肥大の風土病があったが、茶を飲めば予防でき、また茶に対する免疫性もなく、チャノキは乾燥地帯では栽培できなかった。

日本へは、栄西が臨済宗の禅とともに南宋の茶文化を持ち帰った。現代の日本の茶文化の起源。cf. 羅漢供茶

★明の太祖・朱元璋が抹茶を禁止

モンゴルの支配を打ち破り江南地方から明王朝を興した農民出身の朱元璋は、重農主義的政策を行い、高価な抹茶を禁止した。保存性に優れた半発酵茶が普及しはじめる。

★清の茶とアヘン戦争

西洋人は当初、日本の茶文化に触れたが、後に中国茶のほうが世界に普及した。英国は、清から茶、陶磁器、絹などを大量に輸入し、大赤字だった。英国は清にアヘンを輸出した。これがアヘン戦争(1840年勃発)の原因である。

○その他

★毛沢東と茶

農民出身の毛沢東は、歯磨きの習慣がなく、起床後はお茶で口をゆすいでそのまま飲み干し、お茶の葉を噛んだ。

★茶樹王

茶の原産地の一つと目される雲南省に自生する巨大な茶の木のこと。複数ある。

★武夷岩茶

ウーロン茶の一種で、福建省の武夷山の岩肌に生育するチャノキの茶。高級。

★国宴茶

○千葉県の茶

佐倉茶から八街茶(やちまたちゃ)へ。

一時は静岡に次ぐ茶の生産地だったが、その後は落花生にシフトした。

【宣伝です】

加藤徹著『漢文で知る中国』

NHK 出版、1,870 円 (税込)

発売中